

令和元年8月30日現在

機関番号：32711

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2018

課題番号：25370724

研究課題名(和文) シティズンシップ論へのコミュニケーション学的アプローチの模索

研究課題名(英文) Approaching Citizenship theories from Communication Studies

研究代表者

藤巻 光浩 (Fujimaki, Mitsuhiro)

フェリス女学院大学・文学部・教授

研究者番号：50337523

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：シティズンシップ教育とコミュニケーション学が関係する複数の場を調査・分析し、コミュニケーション学とシティズンシップ教育の間の親和性が高いことの認識を新たにした。双方とも、他者の歴史的背景・社会的条件を加味すること、自らの価値判断や力を相対化することを問い直すためである。具体的には、(1)誰をも、教育や啓蒙の場から締め出すことがない規範としての公共性の担保こそが、その場のコミュニケーションを促すこと、(2)そして、公共性を担保するためには、多様で複数の人たちが集まる公共の場において必然的に生じるディセンサス(齟齬)の解消ではなく、それを生かす方向性を持たせることが必要であることが分かった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

シティズンシップ教育において、コミュニケーション教育が大きな役割を果たすことは論をまたない。とかく国民国家の影響を強く受ける教育やその他の啓蒙の場において、公共性を担保するのは困難ではあるが、本研究は、教育や啓蒙の場が固有に生み出すであろう衝突や齟齬を、その場にいる人々が解消することに公共性を認めるのではなく、それらを保持しつつ、その中から差異が生まれる場を共有し合うことをゴールとするモデルを提示した。その場こそが、さらなるコミュニケーションを生み出し、シティズンシップについて考察することができ、機会を生み出すという認識が極めて重要である。衝突や齟齬を生み出す差異を生かすということだ。

研究成果の概要(英文)：This project reconfirms the much accumulated recognition that citizenship education and Communication Studies share a lot in common within practical terrains, through conducting multiple inquiries and research. This is because both pedagogies compel practitioners to historically re-contextualize relations between the self and others, and thereby calling into a question power relations embedded within the fore-mentioned relations. Specifically, this project has two findings. First, both pedagogies urge practitioners to sustain publicness from which nobody is excluded in education and spaces for enlightenment such as public speeches by political figures, chants in political rallies, and museum exhibits, and others. Second, “dissensus,” or disagreements, which inherently arises within pedagogical spaces, plays a critical role in sustaining “publicness.” This project concludes that dissensus has to be open, inviting further discursive praxis, without foreclosing itself into silence.

研究分野：コミュニケーション学

キーワード：シティズンシップ教育 公共性 ディセンサス コミュニケーション教育

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化に伴い、シティズンシップ教育のニーズが高まってきたにも関わらず、必ずしもそれは日本社会において、広く浸透してきたわけではない。特に、コミュニケーション学領域においては、所謂「コミュニケーション能力」の習得ばかりが取りざたされてきた。ここでのコミュニケーション能力とは、個人がグローバル社会で生き延びるためのエンパワーメントの手段として位置づけられることがほとんどであり、社会や政治のあり方を、シティズンシップ概念の再考を通して変化させるというよりは、市場原理至上主義下、それを忘れ去ってもやむなしの風潮に火を注ぐかに見える。そこにおいては、多様で複数のアイデンティティや出自を持つ他者存在や、自分もまた複合的な出自を持ち得る可能性があることを否認する声も多い。この意味で、コミュニケーション学、取り分けレトリックにおけるシティズンシップ教育の研究は、その原理から言えば共和主義的であるため馴染みがあるように見えるが、あまり進んでこなかった(藤巻 2013)。

### 2. 研究の目的

上記の背景から、シティズンシップ教育においてコミュニケーションが介在する側面を、様々な領域や文脈において定位し、その可能性を模索し、そこで得られた知見を教育モデルのかたちにして提示することを目的とした。

### 3. 研究の方法

シティズンシップ教育にコミュニケーションが介在する側面は、学校教育の現場だけではないため、それに加え、法の成り立ちにおけるシティズンシップ概念の組成過程、美術館などのミュージアム展示、家庭における政治に関する談話、政治家による演説、日本におけるディベートの草の根交流等に分類し、シティズンシップ教育に固有のコミュニケーション実践が中心的役割を果たす要素をそれぞれから見出し、収斂させた。

### 4. 研究成果

それぞれの研究において、シティズンシップ教育が機能するためには、公共性が担保されることが大前提であることを確認した。ここでの公共性とは、国家や民族などの枠組みに限定されることなく、また排他的な社会知が席巻するのでもなく、そこに参画する人間のポテンシャルが最大限に生かされる場のことである。一言でいえば、それは誰にでも「開かれた」状態であることが担保されれば、アイデンティティや使用言語などの複数性が維持されることとなる。

例えば、移民や越境者の子弟たちは、複数文化・複数言語の環境に置かれているため、教育現場も、ヨーロッパで採用されているような複言語主義の採用が望ましいことが報告された(山脇 2016)。また、市民教育や啓蒙を担うミュージアムにおいては、市場原理が席巻しているため、シティズンシップを育むことなど念頭に入れられていないことが多いが、批評という言語実践を通して、解釈の複数性についていくことで、公共の可能性が開示されることも提示された(藤巻 2015, 2016)。

このような公共性を担保するためには、そこで起こり得るコンフリクトや齟齬(=ディセンサス)を、どのように生かすのかが重要であることも分かった。まず、森泉による知見は、一見、政治的に閉じた空間のように位置づけられる家族であるが、コンフリクトが育む精神的健康(ウエルビーイング)の可能性に満ちていることを提示した。さらに、Aonuma(青沼)は、日米間の交換ディベート・プログラムが、異なる視点から議論する中で、ディセンサスを通して草の根の交流を育まれたことを提示し、そこで担保され得る公共性の重要性を説いた(2015)。

複数のバックグラウンドや言語を背景に成立する公共性であるが、そこにおいては対立やコンフリクトが固有に起こる。Fukumoto(福本)は、米国ニューメキシコ州の観光地などで販売される原爆ピアスに注目し、原子爆弾の投下をめぐる解釈の差異があることを提示。その差異を、どちらかの視点の中に吸収させるのではなく、これから起こり得る議論の可能性が、教育の場などで開かれることを示した(2015)。同様に、藤巻は、米国のホロコースト博物館の展示に注目し、解釈の差異は展示に固有に生じるものであるため、それを将来に生かすための視点が必要であることを提示した(2015)。

これらの研究が示すように、解釈の齟齬やコンフリクトなどを、特定の視点に回収させ解消するのではなく、他者存在を認識する絶好の機会としてとらえる新しい視点をコミュニケーション実践の中に盛り込むことが必要である。これが、本研究を通して獲得することができた一番大きな知見であり、それがシティズンシップ教育の根幹を為すであろう。なお、この考え方をモデルにした=コミュニケーション学的シティズンシップ教育の在り方や規範は、教科書というかたちにして結実させた(藤巻ほか編『グローバル社会のコミュニケーション学入門』ひつ

じ書房、2019)。この教科書においては、シティズンシップ教育がコミュニケーション学に埋め込まれるべく、多様な事例研究を軸にして、齟齬やディセンサスを、さらなるコミュニケーションや、シティズンシップに対する議論を呼び込む存在として定位している。

一方、解釈の齟齬やコンフリクトなどを、他者存在を認識する絶好の機会としてとらえることは、なかなか抽象的でもあるし、汎用性が証明されたわけでもない。藤巻(2015)は、それらを生かすミュージアム展示の解釈実践の中に織り込み、さらなる議論を呼び込む方法を提示したものの、この視点は、これから様々な文脈において、検証されなくてはならないだろう。コンフリクトが最初から顕在化している政治デモにおける可能性や、あからさまな政治言説が抑制されるミュージアムや、国策である原子力発電所などの付設PR館においては、藤巻が問題点を記したが(2018)、さらなる事例研究の積み重ねが求められている。

#### 出典一覧

- Aonuma, Satoru et al. "Revisiting the U.S. Footprints: A Critical exploration of Interscholastic/Intercollegiate Policy debate in Post-World War II Japan," *Disturbing Argument: Selected Works from the 18<sup>th</sup> NCA/AFA Conference on Argumentation*. Vol. 18(2015): pp. 432-437.
- 『グローバル社会のコミュニケーション学入門』(藤巻光浩&宮崎新編)ひつじ書房、2019年。
- Fukumoto, Akiko, "For Exploring the Narrative of Humanity beyond National Borders –Through the Bomb Earring Controversy," 『愛知淑徳大学論集—ビジネス学部・ビジネス研究科篇』Vol. 11(2015) : pp.95-114.
- 藤巻光浩「これからの市民社会とレトリック教育」『スピーチ・コミュニケーション教育』第26巻(2013) : pp.49-56.
- 藤巻光浩『アメリカに渡った「ホロコースト」：ワシントンDCのホロコースト博物館から考える』創成社、2015年。
- 藤巻光浩「「制度としての美術館」と作品の意味・可能性～森美術館における会田誠回顧展と「ボルノグラフィー」論争～」『日本コミュニケーション研究』第45巻(2016) : pp. 47-70.
- 藤巻 光浩「レトリカルなメディアとしてのニュークリア・ミュージアム—市場原理万能時代のシティズンシップの行方—」『日本コミュニケーション研究』第47巻(2018) : pp. 5-23
- 森泉哲「社会参加はいかに促進されるのか—個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連」『南山大学短期学部紀要』第39巻(2018) : pp.191-201.
- 山脇千賀子「複数言語と「共に生きる」ために—移民/越境者をめぐる教育問題・複言語主義・異文化間交流」『世界と未来への架橋』文教大学国際学部叢書編集委員会編、2016年、pp.33-59.

#### 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 10件)

- 森泉哲「社会参加はいかに促進されるのか? - 個人及び家族要因とウェルビーイングとの関連」『南山大学短期学部紀要』第39巻(2018) : pp.191-201 .
- 藤巻 光浩「レトリカルなメディアとしてのニュークリア・ミュージアム—市場原理万能時代のシティズンシップの行方—」『日本コミュニケーション研究』第47巻(2018) : pp. 5-23 <査読有>.
- 山脇千賀子「ペルーにおける演劇的手法による教育の現状」『ラテンアメリカ・カリブ研究』第24巻(2017) : pp.45-58. <査読有>
- 福本明子「米国スタンフォード大学発信の終戦70周年談話：談話の多様性についてのキーワードからの考察」『愛知淑徳大学論集 ビジネス学部・ビジネス研究科篇』Vol.12(2016) : pp.41-53.
- 山脇千賀子「複数言語と「共に生きる」ために—移民/越境者をめぐる教育問題・複言語主義・異文化間交流」『世界と未来への架橋』文教大学国際学部叢書編集委員会編、2016年、pp.33-59.
- 藤巻光浩「「制度としての美術館」と作品の意味・可能性～森美術館における会田誠回顧展と「ボルノグラフィー」論争～」『日本コミュニケーション研究』第45巻(2016) : pp. 47-70. <査読有>
- Aonuma, Satoru et al. "Revisiting the U.S. Footprints: A Critical exploration of Interscholastic/Intercollegiate Policy debate in Post-World War II Japan," *Disturbing Argument: Selected Works from the 18<sup>th</sup> NCA/AFA Conference on Argumentation*. Vol. 18(2015): pp. 432-437. <査読有>

山脇千賀子「第二次世界大戦前後のペルーにおける日系社会とキリスト教 - 金城次郎日記を導き手として - 」『移民研究』第 10 巻 (2015) : pp.1 - 22. <査読有>

Fukumoto, Akiko, “For Exploring the Narrative of Humanity beyond National Borders -Through the Bomb Earring Controversy,” 『愛知淑徳大学論集 ビジネス学部・ビジネス研究科篇』 Vol.11(2015) : pp.95-114.

藤巻光浩「これからの市民社会とレトリック教育」『スピーチ・コミュニケーション教育』第 26 巻(2013) : pp. 49-56. <依頼論文>

〔学会発表〕(計 9 件)

藤巻 光浩「ミュージアムにおけるコミュニケーションとシティズンシップ～核エネルギーとその科学技術展示のから考える～」日本コミュニケーション学会中部支部大会、2015 年 12 月 19 日、愛知淑徳大学。

福本明子「戦後 70 周年談話とシティズンシップ～談話の多様性についての考察～」日本コミュニケーション学会中部支部大会、2015 年 12 月 19 日、愛知淑徳大学。

山脇千賀子「移民/越境者にとっての教育をめぐる一考察 異文化交流と副言語主義に注目して」日本コミュニケーション学会中部支部大会、2015 年 12 月 19 日、愛知淑徳大学。

Aonuma, Satoru, “Alternative Media and the Unwriting of the Global Village: Reappraising International Radio Broadcasting in the 21th Century,” National Communication Association, November 19th, 2015, Las Vegas, USA.

Aonuma, Satoru and Koresawa, Katsuya, “Have We Forgotten or Let It Go?: Nuclear Crisis, National Restoration and (Not) Recovering Argument in Post-Fukushima Japan,” National Association/ American Forensic Association summer Conference on Argument, July 30th, 2015, Utah, USA.

Fujimaki, Mitsuhiro, “Shes were/have not been ‘Comfort Women’: A Rhetorical Perspective toward the Banality Associated with the Controversy of ‘Comfort Women,’” National Communication Association, November 20th., 2014, Chicago Hilton.

福本明子「文化的暴力との戦い - 村上春樹にみる平和のための言葉 - 」日本メディア英語学会、2014 年 10 月 26 日、於愛知淑徳大学。

山脇千賀子「第二次世界大戦後のペルー日系社会におけるキリスト教 - インターカルチュラルなエージェントとしての移民・キリスト者・社会事業家 - 」日本国際文化学会、2014 年 7 月 5 日、於山口大学。

福本明子、藤巻光浩「シンポジウム：コミュニケーションと平和」日本コミュニケーション学会(招待講演)2014 年 6 月 21 日、於琉球大学。

〔図書〕(計 3 件)

『グローバル社会のコミュニケーション学入門』(藤巻光浩・宮崎新編)ひつじ書房、2019 年。(全 286 頁)

藤巻光浩『アメリカに渡った「ホロコースト」：ワシントン DC のホロコースト博物館から考える』創成社、2015 年。(全 276 頁)

山脇千賀子『私たちの国際学の「学び」』新評社、2015 年；pp.156-175、176-196 .

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年：

国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：

発明者：

権利者：

種類：  
番号：  
取得年：  
国内外の別：

〔その他〕  
ホームページ等

## 6．研究組織

### (1)研究分担者

研究分担者氏名：青沼 智  
ローマ字氏名：Satoru,Aonuma  
所属研究機関名：津田塾大学  
部局名：学芸学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：50306411

研究分担者氏名：山脇 千賀子  
ローマ字氏名：Chikako,Yamawaki  
所属研究機関名：文教大学  
部局名：国際学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：40302343

研究分担者氏名：森泉 哲  
ローマ字氏名：Satoshi,Moriizumi  
所属研究機関名：南山大学  
部局名：国際教養学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：60310588

研究分担者氏名：福本 明子  
ローマ字氏名：Akiko,Fukumoto  
所属研究機関名：愛知淑徳大学  
部局名：グローバル・コミュニケーション学部  
職名：教授  
研究者番号(8桁)：70387835

### (2)研究協力者

研究協力者氏名：  
ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。